

電気学会論文誌 L^AT_EX 2_ε クラスファイル ieej.cls の使い方

正 員 電子 太郎* 非会員 電気 花子**

How to Use the L^AT_EX 2_ε Class File (ieej.cls)
for the Transaction of The Institute of Electrical Engineers of Japan

Taro Denshi*, Member, Hanako Denki**, Non-member

IEE Japan provides a L^AT_EX 2_ε class file, named ieej.cls, for the Transaction of The Institute of Electrical Engineers of Japan. This document describes how to use the class file, and also makes some remarks about typesetting a document by using L^AT_EX 2_ε. The design is based on ASCII Japanese pL^AT_EX 2_ε.

キーワード: クラスファイル, アスキー版日本語 pL^AT_EX 2_ε

Keywords: class file, ASCII Japanese pL^AT_EX 2_ε

1. まえがき

本ドキュメントは電気学会 L^AT_EX 2_ε クラスファイルを使って論文を記述する際の注意事項をまとめたものです。2 節で、このクラスファイルに従った記述方法を、3 節でクラスファイル全般に関する注意事項を、4 節で、原稿作成の際のタイピングの注意事項および数式が版面をはみ出す場合などの処理方法を、5 節でソースファイルの提出にあたっての注意事項を説明します。

原稿作成にあたっては、このクラスファイルと同時に配布される template.tex を利用してください。

本誌の組版体裁に従って、各種パラメータおよび出力体裁を設定していますので、レイアウトにかかわるパラメータは絶対に変更しないでください。

2. テンプレートならびに記述方法

「論文」、「研究開発レター」、「英文論文」、「解説」のタイプ別によって、記述の仕方が若干異なります。

「論文」タイプから順に説明します。

〈2・1〉「論文」タイプの記述方法

```
\documentclass{ieej}
```

```
\FIELD{A}
```

```
\YEAR{2009}
\NO{1}
\jtitle{和文タイトル}
%\jtitle[柱用タイトル]{和文タイトル}
\etitle{英文タイトル}
\authorlist{%
  \authoreentry{日本語名}{ローマ字名}
    {会員種別}{ラベル}
}
\affiliate[ラベル]
  {和文所属\\ 連絡先}
  {英文所属\\ 連絡先}
\received{7}{7}{20}
\revised{15}{1}{14}
\begin{document}
\begin{abstract}
英文 Summary
\end{abstract}
\begin{jkkeyword}
和文キーワード
\end{jkkeyword}
\begin{ekkeyword}
英文キーワード
\end{ekkeyword}
\maketitle
\section{まえがき}
---- (略) ----
\begin{thebibliography}{99}
\hibitem{}
```

* 新日電機 (株) 技術研究所
〒 102-0076 東京都千代田区五番町 7-2
Technical Research Labs., Shin-nichi Electric Co., Ltd.
7-2, Gobancho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0076

** 鹿児島電子 (株) 技術研究所
〒 890-0099 鹿児島市代官町 2-100
Technical Labs., Kagoshima Electron Corp.
2-100, Daikancho, Kagoshima 890-0099

```
\bibitem{}
---- (略) ----
\end{thebibliography}
\appendix
\section{}
---- (略) ----
\acknowledgment % 謝辞
---- (略) ----
\begin{biography}
\profile{会員種別}{日本語名}{著者紹介}
\end{biography}
\end{document}
```

以下、記述方法を説明します。

- `\FIELD` は掲載希望の部門誌の指定です。`\FIELD` の引き数として、
「基礎・材料・共通部門誌」は A を、
「電力・エネルギー部門誌」は B を、
「電子・情報・システム部門誌」は C を、
「産業応用部門誌」は D を、
「センサ・マイクロマシン部門誌」は E を、
それぞれ指定してください。
- `\YEAR` は `\YEAR{2009}` のように西暦を指定してください。`\YEAR{2009}` でも `\YEAR{09}` でもかまいません。
- `\NO` は `\NO{1}` のように月をアラビア数字で指定してください。
`\YEAR`, `\NO` については、投稿論文がいつ掲載されるかわからない場合は、引数を空にするかコマンドをコメントアウトしてください。
- `\jtitle` には、論文のタイトルを 40 字以内でタイプしてください。任意の場所で改行したい場合には、`\\` で改行してください。
`\jtitle` の引き数は柱（ヘッダー）にも出力されます。タイトルが長すぎて柱がはみ出す場合（ワーニングが出力されます）には、
`\jtitle[柱用タイトル]{タイトル}`
のように柱用に短いタイトルを指定してください。
- `\etitle` には英文タイトルをタイプしてください。引き数を柱に出力しないため、`\etitle[柱用タイトル]{タイトル}` という使い方はできません。
- 著者のリストを出力するには、以下のように記述してください。著者名、会員種別、所属などの出力体裁が自動的に整えられます。

```
基本的なスタイルは
\authorlist{%
\authorentry{名前}{ローマ字名}
{会員種別}{ラベル}
}
```

という形です。例えば、次のように記述してください。

```
\authorlist{%
\authorentry{電子_太郎}{Taro_Denshi}
_m}{TRL}
\authorentry{電気_花子}{Hanako_Denki}
_n}{KEC}
}
```

著者のリストを `\authorentry` に記述し、リ
体を `\authorlist` の引き数にします。

- 第 1 引き数は著者の日本語名を指定します。
名の間には必ず半角のスペースを挿入して
い（スペースを挿入し忘れた場合には、ワ
グが出力されます）。
- 第 2 引き数は著者のローマ字名を指定しま
ペルの最初の文字は大文字で記述してくだ
さい。
- 第 3 引き数は会員種別を表すアルファベッ
述します。

第 3 引き数に指定できる文字は、m, a,
n, h, S, f のうちのいずれか 1 つです。
合、**引き数の前後に余分なスペースを入れ
ください**。たとえば `{m_}` では会員種別は
れません。

member	正員	Member
associate member	准員	Associate
student member	学生員	Student Member
life member	終身会員	Life Member
non-member	非会員	Non-member
honorary member	名誉員	Honorary Member
Senior member	上級会員	Senior Member
fellow	フェロー	Fellow

左欄は指定する文字、中・右欄は出力される会員種別

- 和文論文の場合、欧文で出力される著者名
種別の出力で、著者が多数の場合などに任
所で改行を行いたい場合は、`\breakauthor`
コマンドを使用してください。
`\breakauthorline{3}` とすれば 3 人目
の後ろで改行します。引数には、カンマで
て複数の数字を指定できます。
- 第 4 引き数は著者の所属ラベルを指定しま
述する `\affiliate` コマンドの第 1 引き
応しています。ラベルは大学名、企業名、
どを表す簡潔なものにしてください。この場
**引き数の前後に余分なスペースを入れない
さい**。

著者に所属がない場合は、`none` と記述
ください。

`\authorentry` には著者を何人でも指定する
できます。

- 著者の所属は `\affiliate` に指定します。基本
タイトルは
`\affiliate[ラベル]`

{和文所属\\ 連絡先}

{英文所属\\ 連絡先}

という形です。

第 1 引き数に `\authorentry` で指定したラベルに対応するラベルを指定します。第 2 引き数に和文の所属と連絡先を、第 3 引き数に英文所属と連絡先を指定してください。この場合も、ラベルの前後に余分なスペースを挿入しないでください。`\authorentry` に記述したラベルの出現順に記述するようにしてください。

- `affiliate` のラベルが、`\authorentry` で指定したラベルと対応しないときは、ワーニングメッセージが端末に出力されます。

- `\received`, `\revised` には、受付、再受付の日付をタイプしてください。それぞれ 3 つの引き数を取り、前から順に年 (元号)、月、日の数字をタイプします。次のように記述すれば

```
\received{7}{7}{20}
```

```
\revised{15}{1}{14}
```

文献リストの前に (文献リストがない場合は、著者紹介の前に)

(平成 7 年 7 月 20 日受付, 平成 15 年 1 月 14 日再受付)
と出力されます。

- 英文 Summary は `abstract` 環境に、150~200 words 以内で、和文キーワードと英文キーワードはそれぞれ `jkeyword` 環境と `ekeyword` 環境に、6 つ以内で記述してください。
- これらのコマンドを指定した後、`\maketitle` を置いてください。
- `\appendix` は、L^AT_EX 2_ε 標準のスタイルではセクション番号をアルファベットにして、カウンターをリセットしますが、このクラスファイルでは、“付録” という見出しを出力します。

数式番号は“(付 1)”となります。図表のキャプションは、図の場合、“app. Fig. 1”と出力されます。

- `\acknowledgment` コマンドは、謝辞を記述する場合に使用してください。
- 著者紹介を出力するには、`biography` 環境の中で `\profile` コマンドを使用してください。
`\profile{m}{電子〇太郎}{19xx 年生。19xx 年 xx 月 XX 大学工学部電気科卒業。〇-----〇 (略) 〇-----}`

第 1 引き数には会員種別を、第 2 引き数には名前を、第 3 引き数には略歴を、それぞれタイプしてください。

写真を省略する場合には、`\profile*` コマンドを使用してください。

- 第 1 引き数は、`\authorentry` の第 3 引き数と同じように、会員種別を表す m, a, s, l, n, h, S, f のうちのいずれか 1 つを指定します。
- 第 2 引き数の名前は、姓と名の間に半角スペース

を必ず入れてください。

- 著者の顔写真を印刷する場合は、横 : 縦 = の eps を用意し、著者の出現順に、`a1.eps`, `a2.eps`, ... として、カレントディレクトリに置きます。これらのファイルがカレントディレクトリにあれば、コンパイル時に自動的に読み込みます。

eps の取り込みは、以下のコマンド

```
\resizebox{22mm}{28mm}
```

```
{\includegraphics{a1.eps}}
```

で行っていますから、eps ファイルに記録している BoundingBox の値が実際の画像より大きい場合などには BoundingBox を修正する必要があります。

カレントディレクトリに `a1.eps` などのファイルが用意されていない場合は、四角のフレームになります。

〈2・2〉「英文論文」タイプの記述方法

ドキュメントクラスのオプションとして `english` を指定して「英文論文」タイプの記述方法と異なるのは、

```
\title
```

```
\authorentry
```

```
\affiliate
```

```
keyword
```

です。

```
\documentclass[english]{ieej}
```

```
---- (略) ----
```

```
\title[柱用和文タイトル]{英文タイトル}
```

```
\authorlist{%
```

```
\authorentry{ローマ字名}{会員種別}{ラベル}
```

```
}
```

```
\affiliate[ラベル]{英文所属\\ 連絡先}
```

- タイトルは `\title` コマンドを使います。このコマンドは和文にする必要があるため、必ず `\title[柱用和文タイトル]{英文タイトル}` と記述してください。
- 著者リストの記述は、和文の名前を出力するため引き数が 3 つになります。

```
\authorlist{%
```

```
\authorentry{ローマ字名}{会員種別}
```

```
{ラベル}
```

```
}
```

例えば、次のように記述します[†]。

[†] 英文論文では、著者名は 1 行に 1 名記述するのが基本となりますが、著者数が十数名を越える場合は著者のリストだけでページ半を占めてしまいます。このような場合、著者のリストを 2 段に記述することができます。プリアンプルで

```
\def\authoralign{2}
```

と記述してください。

```
\authorlist{%
\authorentry{Taro Denshi}{m}{TRL}
\authorentry{Hanako Denki}{n}{KEC}
}
```

- 著者の所属の記述も、和文所属を出力する必要がないため引き数が2つになります。

```
\affiliate[ラベル]{英文所属\\ 連絡先}
```

- キーワードは、keyword 環境に記述します。

〈2・3〉「研究開発レター」タイプの記述方法 ドキュメントクラスのオプションとして letter を指定してください。その他は「論文」タイプと同じです。

```
\documentclass[letter]{ieej}
```

英文は

```
\documentclass[english,letter]{ieej}
```

英文 Summary は 100 words 程度でつけることができます。また、著者紹介を省略することもできます。

〈2・4〉「解説」および「特集解説」タイプの記述方法

「解説」および「特集解説」は、ドキュメントクラスのオプションとして、それぞれ comment, feature を指定してください。

「解説」および「特集解説」タイプの場合には、柱に“解説”，“特集解説”と出力されるため、「論文」タイプのように \jtitle[柱用タイトル]{タイトル} と記述する必要はありません。

3. クラスファイルに関する注意

〈3・1〉セクションの字どり 章および節見出しは、3 字以下の場合、4 字どりになるように設定しています (1 章, 〈3・10〉節参照)。

〈3・2〉数式について 本誌のディスプレイ数式は、数式と数式番号をドットでつなぐため、dotseqn.sty を組み込んでいます。

数式の頭は左端から 2 字下げのところに、数式番号は右端から 1 字入ったところに出力されます。この設定を前提に数式の折り返しを調整してください。

たとえば、

```
\begin{eqnarray}
\lefteqn{\int\!\!\int_S\left(\frac{\partial V}{\partial x}-\frac{\partial U}{\partial y}\right)dx dy}
\\&= &\oint_C\left(U\frac{dx}{ds}+V\frac{dy}{ds}\right)ds
\end{eqnarray}
```

と記述すれば、

$$\iint_S \left(\frac{\partial V}{\partial x} - \frac{\partial U}{\partial y} \right) dx dy = \oint_C \left(U \frac{dx}{ds} + V \frac{dy}{ds} \right) ds \dots\dots\dots (1)$$

と出力されます。

本誌の場合、2 段組みで 1 段の左右幅がせまいた式と数式番号が重なったり、数式がはみ出したりすが頻繁に生じられるので、Overfull \hbox セージには特に気をつけてください (〈4・2〉節参照)。

〈3・3〉定理、定義などの環境

定理、定義、命の定理型環境は \newtheorem を利用することができ^{(5) (23)}、本誌の体裁に従って、環境の上下の空き、ントを変更し、見出しはゴシックにせず、環境中のイタリックにならないように設定しています。

たとえば、

```
\newtheorem{teiri}{定理}
\begin{teiri}
$n>2$ に対しては、
方程式 $x^n + y^n = z^n$ の
自然数解は存在しない
(Fermat's last theorem).
\end{teiri}
```

と記述すれば、

〔定理 1〕 $n > 2$ に対しては、方程式 $x^n + y^n = z^n$ の自然数解は存在しない (Fermat's last theorem)。と出力されます。

〈3・4〉脚注について 脚注マークは、カウン進むごとに「†, ††, †††」となります (3 ページ参照)。長いページになっても、カウンターは進まずリセットします。

〈3・5〉図表について キャプションを含め図表字はすべて英文で記述し、本文中で参照する場合は、“Figure 1” “Table 1” などとします。

figure および table 環境の内部は、\footnotetext (7 pt) で組まれるように設定してあります。

番号つきの図表の出力位置を指定する場合、オプションとして [h] は使わず、[tb] などとして、版面の天置くようにしてください。

〈3・5・1〉図の取り込み 図は基本的に POSTSCRIPT 形式を利用してください。

適当なアプリケーション・ツールで作図し、eps 保存します。MAC で作図して、Windows や UNIX にコンパイルされる場合は、eps ファイルの改行コードを換えないと、

```
! Unable to read an entire line---
bufsize=3000.
```

Please alter the configuration file. というエラーを生じることがあります。

取り込み方を簡単に説明します。まずパッケージ \usepackage[dvips]{graphics} などと指定し (お使いのドライバに応じて dvips をものに变更してください)、

```
\begin{figure}[tb]
\begin{center}
\includegraphics[file,eps]{}
```

```

\begin{figure}[tb]
%\capwidth=50mm
... 図の要素 ...
\caption{An example of caption
in English.}
\label{fig:1}
\end{figure}

```

Fig. 1. An example of caption in English.

```

\end{center}
\caption{...}
\label{fig:1}
\end{figure}

```

のように記述します。

```
\includegraphics[scale=0.5]{file.eps}
```

とすれば、図を 0.5 倍にスケールします。同じことを `\scalebox` を使って、次のように指定することもできます。

```
\scalebox{0.5}{\includegraphics{file.eps}}
```

また、幅 30 mm にしたい場合は、

```
\includegraphics[width=30mm]{file.eps}
```

とします。同じことを `\resizebox` を使って次のように指定することができます。

```
\resizebox{30mm}{!}
```

```
{\includegraphics{file.eps}}
```

高さ と 幅 の両方を指定する場合は

```
\includegraphics[width=30mm,height=40mm]
```

```
{file.eps}
```

または

```
\resizebox{30mm}{40mm}
```

```
{\includegraphics{file.eps}}
```

です。

他にもさまざまな利用方法がありますから、詳しくは文献 (18) (21) (26) などをご覧ください。

〈3・5・2〉 キャプション キャプションも英文で記述します。

キャプションの幅は、1 段の図の場合は 72 mm に、2 段めきの図の場合はテキストの幅の 0.8 倍に設定しています。ただし、任意の幅でキャプションを折り返したい場合は、`float` 環境中で `\capwidth` に数値を指定します (Fig. 1 参照)。

〈3・6〉 verbatim 環境 `verbatim` 環境のレフトマージン、行間、サイズを変更することができます⁽²⁷⁾。デフォルトは

```
\verbatimleftmargin=0pt
```

```
% レフトマージンは 0pt
```

```
\def\verbatimsize{\normalsize}
```

```
% フォントサイズ
```

```
\verbatimbaselineskip=\baselineskip
```

```
% 本文と同じ行間
```

ですが、それぞれパラメータやサイズ指定を変更することができます。

Table 1. An example of table caption in English.

A	B	C
X	Y	Z

```

\begin{table}[tb]
\caption{An example of table caption in English.}
\label{table:1}
\begin{center}
\begin{tabular}{c|c|c}
\hline
A & B & C\\
\hline
X & Y & Z\\
\hline
\end{tabular}
\end{center}
\end{table}

```

```
\verbatimleftmargin=2zw
```

```
% --> レフトマージンを 2 字下げに変更
```

```
\def\verbatimsize{\footnotesize}
```

```
% --> サイズを \footnotesize に変更
```

```
\verbatimbaselineskip=3mm
```

```
% --> 行間を 3mm に変更
```

〈3・7〉 文献の引用と thebibliography 環境

引用の `\cite` は、`citesort.sty` および `cite.sty` スタマイズしたものを組み込んでいます。例えば、`\Bech,Gr,itou,ohno,nodera1,PA,Seroul,tex}` とすれば、次のように、番号が続く場合は省略し、番号並べ変えます^{(1)~(4) (6) (10) (12) (22)}。

本文中で“文献 (1) を参照”のように、肩付きで文献番号を出す場合は、「文献 `\Cite{tex}`」を参照述してください。

`thebibliography` 環境については、著者名、文ジャーナル (出版社)、発行年など、イニシャル、略タイトル、順番などは本誌の規則に従ってください。

今のところ Bib_TE_X 用のスタイルファイルは作成ません。

〈3・8〉 \flushbottom について クラスファイルは `\flushbottom` を指定してあります。したがって領域の左右 2 段の下が揃います。

〈3・9〉 AMS パッケージについて 数式のよな記述のために、`AMS-LATEX` のパッケージ⁽²³⁾ を合には、プリアンブルで

```
\usepackage[fleqn]{amsmath}
```

と指定する必要があります。オプションの `[fleqn]` は忘れないようにしてください。

`amsmath` パッケージを利用する場合、多くのデレー数式の環境 (`equation`, `align`, `gather`, `multisplit` 環境など) で、数式と数式番号の間を自動的につなぐことができません。原始的な方法ですが、番号との間をドットでつなぐべき数式の最後に、例下のような記述をすることができます。

Table 2. \FRAC and \RN

\RN{2}	II
\RN{117}	CXVII
\FRAC{\$\pi\$}{2}	$\pi/2$
\FRAC{1}{4}	$1/4$

`\rlap{\hbox to 10mm{\ \EqnDots}}`
これによって、幅が 0mm のボックスの中に、10 mm 幅のドットを右にはみ出させることができます。
なお、`amsmath` パッケージは、多くの機能を提供していますが、フォントとしてボールドイタリックだけを使いたいときは、
`\usepackage{amsbsy}`
で済みます。この場合、`\mbox{\boldmath $x$}` に代えて、`\boldsymbol{x}` を使うことを勧めます。数式の上付き・下付きで使うと文字が小さくなります。
また、演算子や記号類だけを使いたいときは、
`\usepackage[psamsfonts]{amssymb}`
で済みます。

3.10 その他

3.10.1 ieej.cls で定義しているマクロ

- 「証明終」を意味する記号 □ を出力するマクロとして `\QED` を定義してあります⁽¹⁾。`\hfill$\Box$` では、この記号の直前の文字が行末に来る場合、記号が行頭に来てしまいますので、`\QED` を使ってください。
- `\onelineskip`, `\halflineskip` という行間スペースを定義しています。その名の通り、1 行空け、半行空けに使ってください。和文の組版の場合は、こうした単位の空け方が好まれます。
- このクラスファイルでは Table 2 のように、`\RN`⁽¹⁾⁽²⁾ と `\FRAC`⁽¹⁾⁽²⁷⁾ というマクロを定義しています。
- 2 倍ダッシュの “——” は、`\ddash` というマクロを使ってください。— (---) を 2 つ重ねると、— と— の間に若干のスペースが入ることがあり見苦しいからです。
- このほかに、`\MARU`, `\kintou`, `\ruby`⁽²⁷⁾ を組み込んでいます。使い方については参考文献をご覧ください。

4. タイピングの注意事項

4.1 美しい組版のために

- 和文の句読点は、 “,” “.” “。” (全角記号) を使ってください。和文中では、英文用のカンマ “,” (半角) は使わないでください。
- 括弧類は、和文中で英文を括弧でくくる場合は全角の括弧を使用してください。英文中ではすべて半角ものを使用してください。

例：クラス (Class) ファイル / some (Class) files
上の例のように括弧のベースラインが異なります。

- ハイフン (-), 二分ダッシュ (--), 全角ダッシュ (――) の区別をしてください。ハイフンは、`\`

known など一般的な欧語の連結に、二分ダッシュは、電話番号や pp.298–301 のように範囲をきに使用してください。全角ダッシュは、`em-dash` (—) で、次のような場合に使用し

The em-dash is even longer—it’s used as a situation, as in this sense, and you get it by ---.⁽³⁾

- 全角ダッシュよりも長い 2 倍ダッシュ “――” については、3.10.1 節を参照してください。
- アラインメント以外の場所で、空行を広くめ、`\` による強制改行を乱用するのはよく
- 空行の直前に `\` を入れたり、`\` を 2 つば、確かに縦方向のスペースが広がりますが、`\Underfull \hbox (badness 10000) ..` というメッセージがたくさん出力されてしまいうなメッセージを見落としがちになってしまいうな使い方をしてください。
- (`\word`) のように “ () ” 内や “ () ” 語の前後にスペースを入れないでください。
- プログラムリストなど、インデントが重要は、力わざ (`\hspace*{??mm}`) の使用や `\` による強制改行) で整形するのではなく、`list` や `tabbing` 環境などを使ったほうがのちの
- 数式モードの中でのハイフン、二分ダッシュイナスの区別をしてください。例えば、
`$A^{\mathrm{b}}\mbox{-}\mathrm{c}$`
 $A^{b-c} \Rightarrow$ ハイフン
`$A^{\mathrm{b}}\mbox{--}\mathrm{c}$`
 $A^{b-c} \Rightarrow$ 二分ダッシュ
`$A^{\mathrm{b-c}}$`
 $A^{b-c} \Rightarrow$ マイナス
となります。それぞれの違いを確認してく
- 数式の中で、`<`, `>` を括弧のように使用するよくみられますが、数式中ではこの記号は不号として扱われ、その前後にスペースが入りこのような形の記号を括弧として使いたいと `\langle`, `\rangle` (`\langle`, `\rangle`) を使うようにしてく
- 複数行の数式でアラインメントをするときが + または - で始まる場合、+ や - は単子とみなされます (つまり、 $+x$ と $x+y$ の後のスペースは変わります)。したがって、複数式で + や - が先頭にくる場合は、それら演算子であることを示す必要があります⁽⁶⁾。
`\begin{eqnarray}`
`y &=& a + b + c + \dots + e \backslash`
`& \mbox{+} & f + \dots`

`\end{eqnarray}`

(11) T_EX は、段落中の数式の中 ($\$ \dots \$$) では改行をうまくやってくれないことがあるので、その場合には `\allowbreak` を使用することを勧めます⁽²²⁾。

〈4・2〉 長い数式の処理 数式と数式番号が重なったり数式がはみ出したりする場合の対処策を、いくつか挙げます。

例 1 `\!` で縮める

$$y = a + b + c + d + e + f + g + h + i + j + k + l + m + n + o(2)$$

数式と数式番号が重なったり、数式番号が右に押しやられたり、かなり接近する場合には、まず、2 項演算記号や関係記号の前後を、`\!` ではさんで縮める方法があります。

`\begin{equation}`

`y\!=\!a\!+\!b\!+\!c\!+\!\dots\!+\!o`

`\end{equation}`

$$y = a + b + c + d + e + f + g + h + i + j + k + l + m + n + o(3)$$

縮めてもお重なったりはみ出してしまう場合は、

例 2 `equation` に代えて `eqnarray` を使う

`\begin{eqnarray}`

`y \&\& a+b+c+d+e+f+g+h\!\nonumber\!`

`\&\& \mbox{}+i+j+k+l+m+n+o`

`\end{eqnarray}`

のように、途中で折り返せば、

$$y = a + b + c + d + e + f + g + h \\ + i + j + k + l + m + n + o \dots \dots \dots (4)$$

のようになります。

例 3 数式を途中で切りたくない場合、`\mathindent` を変更する[†]。

`\mathindent=0zw % <-- [1]`

`\begin{equation}`

`y=a+b+c+d+e+f+g+h+i+j+k+l+m+n+o`

`\end{equation}`

`\mathindent=2zw % <-- [2] デフォルト`

と記述すれば ([1])、

$$y = a + b + c + d + e + f + g + h + i + j + k + l + m + n + o(5)$$

となって、数式の頭が左端にきます。この場合、その数式の後で `\mathindent` というパラメータを元に戻すことを忘れないでください ([2])。

例 4 `\lefteqn` を使う。

$$\iint_S \left(\frac{\partial V}{\partial x} - \frac{\partial U}{\partial y} \right) dx dy = \oint_C \left(U \frac{dx}{ds} + V \frac{dy}{ds} \right) \quad (8)$$

このように、関係演算子 (=) まだが長くて、数み出したり、数式と数式番号が重なる場合には

`\begin{eqnarray}`

`\lefteqn{`

`\int\!\!\!\int\!\!\!\int_S`

`\left(\frac{\partial V}{\partial x} - \frac{\partial U}{\partial y}\right)`

`\frac{\partial U}{\partial y}\right)\!\!\!\right)`

`\quad \nonumber\!`

`\oint_C \left( U \frac{dx}{ds} + V \frac{dy}{ds} \right) ds`

`\right) ds`

`\end{eqnarray}`

のように `\lefteqn` を使えば、

$$\iint_S \left(\frac{\partial V}{\partial x} - \frac{\partial U}{\partial y} \right) dx dy \\ = \oint_C \left(U \frac{dx}{ds} + V \frac{dy}{ds} \right) ds \dots \dots \dots$$

となります。

例 5 `array` 環境では、`\arraycolsep` の値を変えて @ 表現を使う。

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \dots & a_{mn} \end{pmatrix} \dots \dots \dots$$

& で区切られた各要素の間や括弧との間隔を縮め

`\begin{equation}`

`\arraycolsep=3pt % <--- [1]`

`A = \left(`

`\begin{array}{@{\hspace{2pt}}cccc`

`@{\hspace{2pt}}}`

`% \uparrow [2]`

`a_{11} & a_{12} & \ldots & a_{1n} \\\`

`a_{21} & a_{22} & \ldots & a_{2n} \\\`

`\vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\\`

`a_{m1} & a_{m2} & \ldots & a_{mn} \\\`

`\end{array}`

`\right)`

`\end{equation}`

[1] のように、`\arraycolsep` の値を小さくしてみる (フォルトは 5pt), [2] のように @ 表現を使います。

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \dots & a_{mn} \end{pmatrix} \dots \dots \dots$$

(8) と (9) を比べてください。

例 6 `matrix` では `\quad` の定義を変える。

行列を記述する際に使用する `\matrix`、`\matr`

[†] これは左寄せの数式の場合です。一般のセンタリングの数式には当てはまりません。

ラムの間に `\quad` が挿入されているので、間隔を縮めるには、ディスプレイ数式環境の中で、`\quad` の定義を変えてみて下さい。

```
\begin{equation}
\def\quad{\hskip.75em\relax}
%% デフォルトは \hskip1em
A = \pmatrix{
a_{11} & a_{12} & \ldots & a_{1n} \cr
a_{21} & a_{22} & \ldots & a_{2n} \cr
\vdots & \vdots & \ddots & \vdots \cr
a_{m1} & a_{m2} & \ldots & a_{mn} \cr
}
\end{equation}
```

AMS パッケージを使用される場合は、`\pmatrix{...}` 型ではなく、`\begin{pmatrix} ... \end{pmatrix}` 型になりますから注意してください。数式を縮める場合は、例 5 の `\arraycolsep` の説明が当てはまります。

以上挙げたような処理でもなお数式がはみ出す場合は、あまり勧められませんが、以下のような方法があります。

- `small`, `footnotesize` で数式全体を囲む。
- 分数が横に長い場合は、分子・分母を `array` 環境で 2 階建てにする。
- 二段抜きの `table*` もしくは `figure*` 環境に入れる。

5. ソース・ファイル提出に際してのお願い

- (1) データの提出に関しては、「電気学会部門誌への投稿手引」を参照して下さい。
 - (2) ソース・ファイルはできるだけ 1 本のファイルにまとめてください。
 - (3) 著者独自のマクロなど、コンパイルに必要なファイル、図の `eps` データなどは忘れずコピーしてください。
- (平成 7 年 7 月 20 日受付, 平成 15 年 1 月 14 日再受付)

文 献

- (1) D.E. クヌース:「`TEX` ブック」, アスキー出版局 (1989)
- (2) 大野義夫編:「`TEX` 入門」, 共立出版 (1989)
- (3) R. Seroul & S. Levy: *A Beginner's Book of T_EX*, Springer-Verlag (1989)
- (4) 野寺隆志:「`LaTEX`」, 共立出版 (1990)
- (5) レスリー・ランポート:「文書処理システム `LaTEX`」, アスキー出版局 (1990)
- (6) 伊藤和人:「`LaTEX` トータルガイド」, 秀和システムトレーディング (1991)
- (7) 野寺隆志:「今度こそ `AmS-LaTEX`」, 共立出版, (1991)
- (8) 磯崎秀樹:「`LaTEX` 自由自在」, サイエンス社, (1992)
- (9) 藤田眞作:「化学者・生化学者のための `LaTEX`—パソコンによる論文作成の手引」, 東京化学同人 (1993)
- (10) G. Grätzer: *Math into T_EX—A Simple Introduction to Am_S-La_TE_X*, Birkhäuser (1993)
- (11) H. Kopka & P.W. Daly: *A Guide to La_TE_X*, Addison-Wesley (1993)
- (12) S. von Bechtolsheim: *T_EX in Practice*, Springer-Verlag (1993)
- (13) 鷺谷好輝:「日本語 `LaTEX` 定番スタイル集」, インプレス (1992–1994)
- (14) 古川徹生・岩熊哲夫:「`LaTEX` のマクロやスタイルファイルの利用」

(1994)

- (15) 阿瀬はる美:「てくてく `TEX`」, アスキー出版局 (1994)
- (16) N. Walsh: *Making T_EX Work*, O'Reilly & Associates
- (17) D. Salomon: *The Advanced T_EXbook*, Springer-Verla
- (18) 中野賢:「日本語 `LaTEX 2ε` ブック」, アスキー出版局 (19
- (19) 藤田眞作:「`LaTEX 2ε` 階梯」, アジソン・ウェスレイ・パブリズ・ジャパン (1996)
- (20) 乙部蔵己, 江口庄英:「`pLaTEX 2ε` for Windows Another Vol.0–2」, ソフトバンク (1996–1997)
- (21) 江口庄英:「*Ghostscript Another Manual*」, ソフトバンク
- (22) P.W. Abrahams: *T_EX for the Impatient*, Addison (1992)
ポール・W・エイブラハム:「明快 `TEX`」, アジソン・ウェ
パブリッシャーズ・ジャパン (1997)
- (23) M. Goossens, F. Mittelbach & A. Samarin: *The La_TE_X panion*, Addison-Wesley (1994)
マイケル・グーセンス, フランク・ミッテルバッハ, アレキ
サマリン:「`LaTEX` コンパニオン」, アスキー出版局 (1998)
- (24) V. Eijkhout: *T_EX by Topic*, Addison-Wesley (1991)
ビクター・エイコー:「`TEX` by Topic—`TEX` をよく深く
の 39 章」, アスキー出版局 (1999)
- (25) B.S. Lipkin: *La_TE_X for Linux*, Springer-Verlag Ne (1999)
- (26) M. Goossens, S. Rahts, and F. Mittelbach: *The La_TE_X ics Companion*, Addison-Wesley (1997)
マイケル・グーセンス, セバスチャン・ラッツ, フランク
ルバッハ:「`LaTEX` グラフィックスコンパニオン」, アスキ
(2000)
- (27) 奥村晴彦:「[改訂版] `LaTEX 2ε` 美文書作成入門」, 技術評論社
- (28) M. Goossens, and S. Rahts: *The La_TE_X Web Com*, Addison-Wesley (1999)
マイケル・グーセンス, セバスチャン・ラッツ:「`LaTEX V
パニオン」, アスキー出版局 (2001)`
- (29) ページ・エンタープライゼス:「`LaTEX 2ε` マクロ & クラ
ミング基礎解説」, 技術評論社 (2002)
- (30) 藤田眞作:「`LaTEX 2ε` コマンドブック」, ソフトバンク (
- (31) 吉永徹美:「`LaTEX 2ε` マクロ & クラスプログラミング実
技術評論社 (2003)

付 録

1. jis.tfm の利用

`jis.tfm` (東京書籍印刷の小林さんが作成された和
ントメトリック) を利用したい場合は、ドキュメン
スのオプションに `usejistfm` を指定します。

```
\documentclass[paper,usejistfm]{ieejj}
```

`jis.tfm` のインストールなどに関しては「日本語工
報」([http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texfa](http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texfaq)
などを参照してください。

2. pdf の作成方法

pdf に書き出すときはまず、`\documentclass`
ションに `mentuke` を加えてコンパイルします。

```
\documentclass[mentuke]{ieejj}
```

pdf に書き出すには二通りの方法があります。

- まず `dvips` を使用して、ps に書き出します。
は段幅の関係で折り返しています。`printer` に
使いのプリンタ名を記述します。

```
dvips -Pprinter -t a4 -O -lin,-lin  
-o file.ps file.dvi
```

次に Acrobat Distiller で pdf に変換します。

- もう一つは `dvipdfmx` を使って pdf にします。

```
dvipdfmx -p a4 -x 0in -y 0in  
-o file.pdf file.dvi
```

3. クラスファイルから削除したコマンド

本誌の投稿論文作成に必要なコマンドは本クラスファイルから削除しました。削除したコマンドは、
`\tableofcontents`, `\titlepage`, `\part`, `\theindex`,
`headings`, `myheadings` とこれらに関連したコマンドなど
です。

電 子 太 郎 (正員) 19xx 年生。19xx 年 xx 月 XX 大学工
学部電気科卒業。19xx 年同大学助手。19xx 年
同講師。19xx 年同助教授。工学博士。主として
XX に関する研究に従事。



電 気 花 子 (非会員) 19xx 年生。19xx 年 xx 月 XX 大学
工学部電気科卒業。19xx 年 XX (株) に入社。
19xx 年同社 XX 研究所所長。現在, XX に勤務。

